

平成 20-21 年度共同利用・共同研究拠点公募プログラム研究  
「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」  
に関わる共同研究成果報告書

プロジェクト名：

ロシア隣接地域との交流から見た中世北西ユーラシア歴史空間の再構築

申請者：

小澤実（名古屋大学グローバル COE 研究員）

構成員：

草生久嗣（千葉大学兼任講師）

橋川裕之（静岡県立大学国際関係学部講師）

成川岳大（日本学術振興会特別研究員）

本申請研究の目的は、歴史空間としての中世北西ユーラシア世界を、ロシアとその周辺諸権力との交渉という観点から、再構築することにある。中世ロシアに関する歴史研究は、ロシア本国であれ、欧米であれ、そしてまた日本であれ、相当数の蓄積がなされていることは周知の事実である。しかしながら、いったん北西ユーラシア世界を一つの歴史空間として定置した場合、中世ロシアの西にはスカンディナヴィア世界、南西にはビザンツ世界、南東にはイスラーム世界が、東部には遊牧諸民族が控えている。中世ロシアは、こうした周辺諸権力と頻繁に政治的、経済的、文化的接触を繰り返した。その結果として、北西ユーラシア世界には、中世ロシアを中核とし、網目のような水路やステップを通じた周辺諸権力とのネットワークを下敷きとした、一つの歴史空間が成立していたことが予想される。しかしながら申請者の知る限りでは、このような交渉という観点からなされた中世北西ユーラシア世界研究はいまなお未開拓である。したがって今後展開されるべき研究の基礎作業をこのプロジェクトで築くことを目的とした。

平成 20 年度は、以上の研究目的にしたがい、構成員各人が個別に研究を進めるとともに、1 月 25 日に、当時橋川が奉職していた早稲田大学に集まり、それまでの研究成果を報告した。平成 21 年度は、前年度に引きつづき構成員が自身の研究を継続するとともに、

長縄宣博准教授を受入教員として共同開催の許可をいただいたスラブ研究センターならびに後援を認められた新学術領域研究「ユーラシア地域研究の比較研究」とともに、シンポジウムの企画と開催にエネルギーを傾注した。申請者はスラブ研究センター側と相談しながら報告者とコメンテータの選定をおこない、10月31日と11月1日に、スラブ研究センター大会議室において、10人の報告者と5人のコメンテータからなるシンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築 ―ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」を開催するに至った。開催するにあたって申請者が報告者に依頼したのは、議論で用いる一次史料を前面に押し出すということ、そして対象とする地域とロシア（ルーシ国家）との関係性を明確にするという二点であった。

本シンポジウムを構成する、ロシアを取り巻く4つの文化圏に区分された4つのセッションは、それぞれ二本の報告とそれぞれに対するコメントで1セッションとした。第1セッション「中央アジアの視点」は、赤坂恒明氏がジュチ裔政権の系譜史料を、川口琢司と長峰博之が15世紀書簡史料を題材とし、近代イスラーム世界の写本史料に精通する堀川徹がコメントをおこなった。第2セッション「イスラーム世界の視点」は、小笠原弘幸が17世紀以前のオスマン帝国の叙述史料を、磯貝健一が20世紀のロシア帝国統治下サマルカンドの裁判史料をとりあげ、17・18世紀ロシアの宗教行政史を専攻する濱本真実がコメントを付した。第3セッション「スカンディナヴィアの視点」は、小澤がヴァイキング時代北欧に特有のルーン石碑を、成川岳大が中世後期のフィンランドとロシアに関わる諸史料を用い、中世ロシア社会経済史の専門家である細川滋がコメントを担当した。第4セッション「ビザンツ帝国の視点」は、草生久嗣がビザンツ叙述史料に見えるペチェネーグという用語を、橋川裕之が黒山のニコンとよばれる人物による写本の行方を題材とし、中世ロシア宗教史を専攻する宮野裕氏がコメントをおこなった。

申請者個人の感想を述べるのが許されるならば、各人の報告もコメントも、本シンポジウムの特徴である越境的な性格を顧慮してのものであり、専門外のものにも十分に訴えかえる内容を持ち、大変刺激的であった。西洋史、ビザンツ史、ロシア史、イスラーム史、中央ユーラシア史といった従来縦割り行政のごとく相互の研究領域に不干渉であった地域の枠を取り払い北西ユーラシアという歴史空間を再構築するという目的は、必ずしも達成されたとはいえないまでも、それが論じるに足るだけのテーマであることは共通

認識として得られたであろうと思われる。またシンポジウム当日は、北海道という地の週末であったにもかかわらず、数多くの参加者を得ることができた。ただ反省点として、規定の報告時間を超過する報告が多く、本来予定していた討議時間を十分にとることができなかった点を指摘しておきたい。地域の枠組みを取り払うことを目的とし、第一線の研究者をひとつのテーブルに糾合した稀有なシンポジウムであったために、この点は返す返す残念なことであった。なおシンポジウムの記録は、『北海道大学スラブ研究センター共同利用・共同研究拠点公募プログラム・シンポジウム「北西ユーラシア歴史空間の再構築 ロシア外部の史料を通じてみた前近代ロシア世界」報告書』（2010年3月 名古屋）として100部刊行され、主要な研究者と研究機関に配布された。